

スタンフォード海外研修報告書

近畿大学医学部附属病院

宮田嘉枝子

今回の研修に期待したことは、まず海外の放射線技術に触れること、cardiac CT の現状を知り CT が心形態評価だけでなく心機能の評価にどれだけ有用なのか知ること、3D ラボでの実際の実習でした。新しい64列CTが今年7月に導入されて特に心筋 perfusion を MRI や心筋シンチグラフィと比較検討したいという要望があり、心臓機能に関する総合的な知識取得に期待していました。CT に関する講義内容は血管外科に対する手術シミュレーション用や coronary 解析が多く、機能解析に関する情報は現在のところシンチグラフィが主流であるということでした。3D ラボでの実習は操作することはできず見学で終わってしまいましたが、スタンフォード大学内に2箇所のラボが設置され、入院用・外来用・小児専門・がん専門と個別に分割された病院とすべてネットワークで接続され3D image 作成・配信がなされていることを見学して、3D 画像の重要度を再認識させられました。ラボを2箇所に増設したこと、そのワークステーションの台数などその設備に今後の3Dの発展が象徴されており、私たちは3D作成のために撮影技術だけでなく解剖学、病理学、情報処理などさまざまな分野を統合させた知識取得につとめなくてはならないと実感しました。専門分野だけにとらわれず大きな視野で放射線技術に関わっていくつもりです。

また分子イメージングはまだ日本でも新しい領域ですが、新しいトレーサーの開発や MRI PET の構想、PET の神経疾患に対する取り組みなど、臓器単位ではなく細胞単位を画像化していく方向にむかいつつあるということ、新しい技術開発が救えなかった命を救えるようになるというスタンフォードの姿勢に感動しました。

セミナーを通じて最も印象に残ったのは診断だけでなく、機能回復のために MRI や PET のように機能を解析できる画像学が重要となるのではないかということ、大学のスタッフが私たちをととても気遣ったプログラムを組んでくださったこと、私たちの要望を快く受入れて下さったことです。本当に関係者の方々に感謝しております。そして今回参加された皆様が前向きで研究熱心な方々ばかりで、夜学でそれぞれの専門分野を講義して下さったことが楽しい以上に大変いい刺激になりました。

今回の海外研修は初回と言うことで、かなりゆとりをもった時間配分になっていましたが、分子イメージングやアメリカでの技師の現状と専門性について詳しく聞きたかったのと質問時間をもう少し長くとってもらって、最低でも10日程度の研修であればよかったと思います。専門分野以外のことであってもアメリカの風に吹かれてお話を聞くと興味が湧いてくる感覚を覚えました。

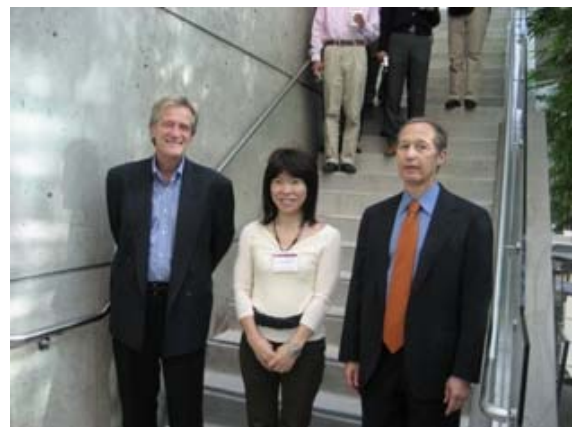


写真: 大変著名なスタンフォード大学の chairman の Gary Glazer 先生と Michael Moseley 先生と一緒に写るなんて生涯で初めて最後のこともかもしれません。一生の思い出になりました。